

平成13年度 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター 心理発達相談室活動報告

平成13年度より、名古屋大学発達心理精神科学教育研究センターが発足した。これまで教育学部に付設されていた心理教育相談室は、発達心理精神科学教育研究センター付設の心理発達相談室へと移行した。教育学部付設の相談室から、全学組織である発達心理精神科学教育研究センター付設の相談室へと移行したことにより、組織の位置づけとしての規模が拡大した。これに伴って、研究、教育活動、さらには社会的貢献をますます求められることとなり、地域社会における社会的責任も増大しつつある。社会情勢が刻々と厳しい状況に変化しつつある中で、自己研鑽および技量の向上が、今後より厳しく求められていくことになるであろう。

I 相談員の構成

平成13年度の当相談室の人的構成は、教官7名、面接指導員12名、大学院研究生4名、大学院生57名、事務職員2名であった。さらに、相談室OBで現在もケースを担当するなど相談室に関わる嘱託相談員14名を含め、総勢96名からなる。室長は森田教授がつとめた。文末の表6に平成13年度の相談室構成員の名簿を示す。

II 相談活動

1. 平成13年度新規相談受理事件数

平成13年度の新規受理事件数は、表1に示すように年間105名である。ここ2年減少傾向であったものの、今年度は前年度の77名より30名近く増加した。年齢別に見ると、12歳以前（幼児・児童）と13歳以降（中学生～成人）の割合は4：6である。性別についてはほぼ半数ずつとなっている。前年度と比較すると、中学生及び高校生の来談人数が減少し、かわりに成人女子の来談者数が20名ほど増加していた。

相談内容別の人数は、表2および表3にまとめた。12歳以前では発達障害が28人で65%を占めていた。例年の

表1 平成13年度 受理事件数の年齢、性別

性別/(年齢)	乳幼児 (0～3)	就学前 (4～6)	小学生 (7～12)	中学生 (13～15)	高校生 (16～18)	大学生・成人 (19～)	計 (%)
男	3	7	21	3	1	12	47 (45)
女	3	4	6	2	1	42	58 (55)
計 (%)	6	11	27	5	2	54	105 (100)
	44 (42)			61 (58)			

50%程度と比較すると、平成13年度はその割合が増加していた。発達障害では「自閉症」が最も多かった。13歳以降については、「子どもの問題」についての親の相談が、前年の8名から20名に倍増した。13歳以降の相談内容については、家族関係などの問題から人格障害圏の問題まで、多岐に渡っていた。

2. 平成13年度面接種別相談受理事件数

本年度の面接種別相談件数を月別にまとめたのが表4である。発達心理精神科学教育研究センター付設になったことに伴い、面接種別に若干の変更を加えて「家族合同面接」（クライアントとその家族を対象とした面接）を新たに追加した。年間の相談件数は3,158回であり、平成12年度の3406件から若干減少した。面接種別では、「臨床心理面接」「遊戯面接」がそれぞれおよそ1,200回で最も多く、次いで「並行心理面接」（子どもの面接と併行する親面接）がおおよそ630回であった。

月別の相談件数の推移を見ると、「臨床心理面接」「遊戯療法」は毎月80～110回、「並行心理面接」は40～60回の間で、ほぼコンスタントに継続面接が行われている

表2 12歳以前の相談内容別受理事件数

診 断 (主症状)	件 数 (%)
発 達 障 害	28 (65)
自 閉 症	18
精 神 発 達 遅 滞	3
言 葉 の 遅 れ	2
学 習 障 害	5
情 緒 障 害	15 (35)
不 登 校	5
集 団 適 応 ・ 対 人 関 係	3
チ ッ ク ・ 吃 音	1
そ の 他	6
計	43 (100)

ことがうかがえる。家族合同面接は、当初少なかったものの、順次増加して24件となった。「検査面接」(各種知能検査、ロールシャッハ・テストなどの人格検査)は、年間で16回であった。

以上、全体の傾向として例年と大きな変動はないものの、年間相談件数(面接回数)は前年を若干下回る結果となった。ここ数年、県内他大学の相談室が相次いで開設されており、来談者の選択肢が以前よりも増えていると考えられる。それらの選択肢の中から、信頼できる相談室として選ばれるようになるためには、技量の向上がスタッフ一人一人に求められている。

Ⅲ 研究活動

当相談室における主な研究活動としては、リサーチ会議、各種研究会の開催、相談室紀要の刊行があげられる。

表5に、本年度のリサーチ会議の実施状況を示した。

表3 13歳以降の相談内容別受理面接数

相談内容	件数(%)
神経症圏の問題	6(10)
境界例	8(13)
うつ病	2(3)
分裂病・分裂病の疑い	1(2)
不登校・学校不適應	3(5)
対人関係	7(11)
家族関係	4(7)
夫婦関係	2(3)
摂食障害	1(2)
自閉症	3(5)
精神発達遅滞	2(3)
子どもの問題	20(33)
子どもの不登校	10
子どもの対人関係	0
子どものその他	10
その他	2(3)
計	61(100)

リサーチ会議は当初、スタッフの事例研究や臨床心理学的調査研究などの発表の場として設けられたものだが、最近の傾向として、集中講義にいられた先生方や近隣の臨床家の方々を講師として招く形式が増えている。相談室スタッフの研究活動の促進は、実践活動を深めていくことにもつながると考えられるので、リサーチ会議のより積極的な活用を進めていきたい。

学外での相互研鑽の機会としては、例年、心理教育相談室をもつ国立五大学(東京大学、京都大学、広島大学、九州大学および名古屋大学)の大学院生が主体となって開催されている「五大学院合同事例検討会」がある。平成13年度は名古屋大学が主幹校となり7月に岐阜市にて開催した。前年度より当相談室スタッフによる準備が行われた。当日は参加者の協力を得て、盛況のうちに終了することができた。また、他大学のスタッフと臨床研究および実践についての活発な意見交換を行い、親睦を深めることができ、非常に有意義なものとなった。

スタッフ個人またはグループによる学会発表や専門誌への論文投稿については、相談室としては数を把握していないが、リサーチ会議や紀要を一つの足がかりとしながら、さらに続けて実践や研究の成果を発表していくことを、特に博士後期課程の大学院生に期待したい。

Ⅳ 教育・訓練体制

当相談室の教育・訓練体制の中心に位置づけられるのは、ケース会議である。ケース会議は原則として毎週金曜日の夕方5時半より開催されている。ニュー・ケース報告や諸連絡事項の伝達を行う全体会の後に、3分科会に分かれて約2時間をかけてケース検討を行っている。ケース会議は、大学院の「臨床心理学研究実習」として位置づけられた。この「実習」には当然のことながら、相談ケースの担当(臨床実践)とそのスーパーヴィジョンを受けることが含まれている。

スーパーヴィジョン制度は、ケース会議と並んで、相談活動の実をあげるための大きな柱である。新規スタッ

表4 平成13年度 面接種別相談受付件数一覧

面接	平成13年												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
受理面接	6	9	6	8	10	5	5	11	6	11	11	12	105
ガイダンス面接	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
検査面接	1	1	1	2	2	5	1	0	1	0	1	1	16
遊戯面接	91	106	104	99	79	105	113	115	98	102	97	99	1,208
臨床心理面接	98	114	103	104	86	86	104	99	87	94	95	111	1,181
並行心理面接	39	58	52	46	39	56	61	63	52	58	47	52	623
家族合同面接	0	0	0	1	0	0	0	2	4	7	5	5	24
計	235	288	266	260	217	257	284	294	253	267	257	280	3,158

平成13年度 名古屋大学心理発達相談室活動報告

表5 平成13年度 心理発達相談室リサーチ会議一覧

	演 者 (所 属)	題 目
第1回 (2001年5月25日)	鶴田和美氏 (名古屋大学学生総合相談センター)	学生相談の実践と研究
第2回 (2001年6月26日)	Ynmi Smith氏 奥山幹夫氏 (犯罪被害者支援都民センターあすの会)	オーストラリアの犯罪被害者支援 —奥山さんの支援を通して—
第3回 (2001年7月6日)	後藤秀爾氏 (愛知学泉大学コミュニティ政策学部)	自閉症長期継続事例の青年豚 —就労・個展・母の死—
第4回 (2002年2月15日)	Brenda Mithchell, PH. D. (Director, Women's Studies Program and Associate Professor of Art History, Indiana University of Pennsylvania, Indiana, Pennsylvania, U.S.A.)	Re-Visions: Creation of Feminist Consciousness in 20th Art

表6 平成13年度 心理発達相談室相談員

教 官	森田美弥子 (相談室長)
指 導 員	田畑 治・藤山 英順・本城 秀次 金井 篤子・村瀬 聡美・平石 賢二 赤塚 大樹・池田 豊應・石川 雅建 伊藤 義美・生越 達美・川瀬 正裕 後藤 秀爾・佐藤 勝利・鶴田 和美 西出 隆紀・西出 弓枝・山口 智子
相 談 員	荒井 紫織・飯野 祐可・石川美由紀 石原美智恵・笠井央理恵・加藤 彩 小石垂希子・河野 荘子・築山彩智子 丹羽早智子・羽根由紀奈・星野 和実 堀 美和子・宮本 淳
大学院研究生	坪井さとみ・草野 香苗・渡邊 玲子 渡辺 由己
大学院生DC	瀬地山葉矢・青山香菜子・今尾 真弓 佐々木靖子・今村友木子・奥野 光 葛 文綺・金子 一史・松嶋 秀明 渡辺 恭子・石原真紀子・加藤 容子 清瀧 裕子・橘 浩太・堀 英太郎 宮崎 朋子・大杉 真紀・佐々木美恵 鈴木英一郎・高城絵里子・西原 ゆき 西村もゆ子・ニラーチュー
大学院生MC	服部 陽子・原田 一郎・松本真理子 李 明憲 伊藤 美紀・乾 哲郎・雑賀美希子 武内 良恵・坪井 裕子・富澤 文江 西田安哉美・西脇喜恵子・畠垣 智恵 福元 理英・水谷みゆき・横井 優子 安斎 純子・細野 久容・稲垣 恵里 大崎 園生・笛吹 素子・久利 恭士 小島美由紀・古山知恵美・鈴木 真之 須田恵理子・竹内 千絵・得能 千代 友松香寿美・浜本真規子・平松 佳子 三輪紀久子・横井麻衣子・吉橋 由香
受 付	神谷 由美・竹内 康子

フについては、それぞれ特定の相談室教官がスーパーヴァイザーとなり初年度の臨床実践指導を受けることが必須とされ、またそのほかの大学院生スタッフも、ケースごとに教官もしくは学外の臨床家によるスーパーヴィジョンを受けている。

相談室以外の教育訓練の場としては、田畑教授の指導の下に大学院生数名が、教育学部附属中学校・高等学校における教育相談活動（よつば相談室）を行っているほか、学校実習、病院実習、情短施設における実習などがカリキュラムの中に位置づけられている。

(文責 金子一史)